

## 遠くて近い信仰者 (1) アブラハム

創世記 22:1~19

聖書に出てくる信仰者は何千年も昔に生きた人々です。私たちにとって遠い存在です。しかし永遠にして創造主なる神は聖書を通して、現代の私たちにも、いにしへの信仰者に示されたようにみ心を示しておられます。その意味においていにしへの信仰者は私たちにとって遠くて近い信仰者と言えます。いにしへの信仰者の姿を通して私たちに示されている神のみ心を見てゆきたいと思います。第一回目の今日はアブラハムです。アブラハムは、旧約において偉大な人物で「アブ」が父、ラハムは「その民にとって」ですから、文字通り「信仰の父」とも呼ばれます。今朝の箇所には、そのアブラハムが一人息子イサクをささげようとしたことが書かれています。ここは信仰者アブラハムのクライマックスと言っても良いところで、アブラハムの神への信仰がみごとに表わされています。今朝は、このアブラハムと神との関係に目を留めながら、神が私たちにどのような信仰を求めておられるかを学ぶことにしましょう。

まず、第一に、神が私達に求めておられるのは「試練によって成長する信仰」です。

創世記 22:1 に「これらの出来事の後、神はアブラハムを試練に会わせられた。」とあります。「これらの出来事」というのは、アブラハムに待望の後継ぎ、イサクが与えられたという出来事です。神はアブラハムを選んで、彼の子孫が約束の地を相続し、世界の祝福の基となると約束しました。しかし、アブラハムには子どもがないまま、彼は百歳、妻のサラも九十歳になってしまいました。ふたりは医学的には子どもを生むことが不可能な状態になっていて、神の選びも約束も果たされないままで終わるかのよう思われました。しかし、そんな時も、アブラハムは神を信じて、ついに約束の子、イサクの誕生を見たのです。アブラハムは、イサクの誕生を見るまで、いくたびも神からの試みにあい、時には不信仰になることもありましたが、最終的には、アブラハムは、試練に対して信仰を働かせ、神の試みに合格し、ついにイサクを得ました。ローマ 4:18-21 に「彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。…アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだは死んでも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。」とある通りです。ですから、アブラハムの物語は、息子イサクの誕生で「めでたし、めでたし」と終わっても良かったのですが、神は、さらにアブラハムを試み、彼にもっと過酷な試練を与えました。それは、せつかく与えられた約束の子イサクを神への犠牲としてささげるということでした。

時々「試練」と「誘惑」とは混同されます。「試練」と「誘惑」とは別のもので、試練は神からのものですが、誘惑はサタンからのものです。試練は、私たちの信仰を成長させるためのものですが、誘惑は、私たちの信仰を弱め、力無いものとし、信仰が成長すれば誘惑がなくなると思っている人がいるかもしれませんが、そうではありません。クリスチャンになったばかりの人にも、成熟したクリスチャンにも同じように誘惑はやってきます。主イエスでさえ、サタンの誘惑を受けられたわけですから。

アブラハムの受けたこの試練は人間的に見れば、なんとも理不尽な要求であり、イサクを与えられて、平安のうちに過ごしていたアブラハムはまたも、苦しみの中に突き落とされたのです。

なぜ、神を信じる者の人生に苦しみがあり、正しく生きる人々にも悩みがあるのか、これは、いつの時代にも、どこに住む人にも、常に存在する疑問です。苦しみや悩みの理由なり原因は多種多様ですがあえて聖書は、試練を受ける理由はそれが私たちの信仰を試すものであり、正しく生きる人々の正しさが明らかになるためのものであると言っています。試練に会うのは、特別な罪を犯したからであるとか、不信仰であるからというわけではありません。むしろ、神が、その人のうちに試練に耐えることができる信仰があると認められたからこそ与えられるものなのです。

「試練」は、文字通りには「テスト」という意味です。このテストによって、神はアブラハムをさらに

ご自分に近づけ、ご自分の約束をさらに確かなものにしようとされたのです。ですから、私たちも、人生におけるさまざまな苦しみや悩みを、神からの試練、あるいは訓練として受け止めたいと思うのです。聖書にあるように、「患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出す」（ローマ 5:3-4）のです。キリスト者にとって試練は希望へとつながっているのです。神が試練を通して希望につながる何かを与えようとされていることを信じましょう。

第二に、神が私達に求めておられるのは「神に従う信仰」です。

神はイサクを全焼のいけにえとしてささげるよう、アブラハムに命じました。全焼のいけにえというのは、動物をすべて、灰になるまで焼き尽くしてしまうささげもののことです。イサクを殺して、すべてを焼き尽くすというのです。このような命令を聞いたアブラハムの心中はどのようなものであったのでしょうか。もし、アブラハムが神をまごころから信じていなかったら、このような命令を馬鹿げたこととして、すぐさましりぞけたことでしょう。子どもをいけにえにして神々にささげるというのは、当時のカナンでよく行われていたことですが、それは、まことの神を知らない人々がしていたことで、神が忌み嫌われる行為でした。ですから、アブラハムは、神がそんなことを命じられるわけがないと、神からのメッセージを否定することができました。あるいは、彼は、自分に聞こえてきたその声は、サタンからの声だと思ってそれを振り払うこともできたのです。しかし、彼は、神の声を聞き分けることができるほど、神に近く生きた人で、それは間違いなく、神からの声であったのです。

アブラハムは、ソドムの町のために、神と交渉したほどの人物でしたから「イサクは、あなたがくださった約束の子ではありませんか。イサクをささげてしまったら、神よ、あなたの約束が反故になってしまうのです。つまり私の代で家系が途絶えてしまいます。それでもいいのですか」と、理路整然と神に迫ることもできました。しかし、この時、アブラハムは、神に対して何の反論もせずに、ただ黙々と神のことばに従っているのです。もちろん信仰の服従は盲従ではありません。しかし、人間の理屈を超えたところにある神のみこころに、ただ黙って従わなければならない時もあるのです。神のことばに従う、服従の信仰が求められることがあるのです。

また、神に従うのに、優柔不断は禁物です。アブラハムが神のことばを聞いたのはおそらく夜のことであったでしょう。彼は、日を置かず、「翌朝早く」（3節）、イサクを連れて神が示したモリヤの山に向かっています。あわてて失敗することもあります。いつまでもじっとしては事は成りません。しなければならないことを先に伸ばし、後回しにしても、大切なことを何ひとつできないまま、人生を終えてしまうかもしれません。神を信じるなら、神に従うべきです。神に従うには最初の一步を踏み出す必要があります。しかし案ずるより産むが易し、一步踏み出すとまた新しい景色が広がっているものです。

アブラハムは、神に示されるまま、家族を離れ、モリヤの山に向かいました。このことも、私たちが神に従う時の姿勢を教えているように思います。キリストにある兄弟姉妹の交わりは、私たちが神に従おうとする時、大いに助けになります。しかし、時と場合によっては、いっさいの人間のつながりを離れて、ひとり神に従わなければならない時もあります。誰がしなくても、誰のサポートがなくても、みんなに反対されても、ただひとり神と向かい合い、ただ神のみ従うという決心が必要な時もあるのです。たとえそのような時でも、神に従っていく信仰を持ちましょう。

第三に、神が私達に求めておられるのは「みずからを神にささげる信仰」です。

モリヤの山がかなたに見えるところにきた時、アブラハムは従者たちに「私と子どもとはあそこに行き、礼拝をして、あなたがたのところに戻ってくる」（5節）と言いました。アブラハムの「礼拝に行く」という言葉は嘘ではありません。アブラハムは確かに礼拝に行くのです。礼拝とは、私たちにとっても大切なものを神にささげることであり、アブラハムは彼にとってもっとも大切なイサクを神にささ

げようとしていたのです。

アブラハムにとってイサクは、自分よりも大切なものでした。アブラハムへの神の約束はイサクによって実現するわけですから、アブラハムがどんなにかイサクに期待をかけ、希望を置いていたかわかりません。アブラハムはイサクの代わりに犠牲になって死んでも良いとさえ思ったでしょう。しかし、アブラハムが自分の命をささげたとしても、アブラハムは彼にとって一番大切なものをささげたことになりませんでした。神が、アブラハムに、彼の命をささげよとは言わず、「イサクをささげよ」と言われたのは、アブラハムにとってイサクが彼の命以上に大切なものだったからです。アブラハムにとってイサクを捧げることは、自分自身をささげることだったのです。アブラハムは、そのことを悟って、神にもっとも大切なものをささげる決心をして、山に登っていきました。

アブラハムにとって神を信じることは、神に従うことであり、神を礼拝することでした。そして、神を礼拝することは、自分をささげるということでした。これは、今日の私たちにとっても真実です。聖書は礼拝とは私たちが自分自身をささげることだと言っています。「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」(ローマ 12:1) あなたは今日何を神様に捧げるつもりで礼拝に参加しておられるでしょうか？

第四に、神が私達に求めておられるのは「神を信頼する信仰」です。

アブラハムとイサクはモリヤの山に登っていきました。聖書は「ふたりはいっしょに進んで行った」(6節)と言っていますから、おそらくは横に並び、同じ歩調で歩いていたことでしょう。ふたりは黙々と歩いていきました。長い沈黙の後、イサクが口を開きました。「お父さん。」するとアブラハムは「何だ。イサク。」と答えました。イサクが尋ねました。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」その時アブラハムは「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」と答えています。これは苦し紛れの答えだったのでしょうか。決してそうではありません。この箇所を最後まで読んで行くとわかるように、神は、アブラハムの言葉どおりに、いけにえの羊を用意しておられました。アブラハムは、たとえイサクをささげたとしても、神がイサクをよみがえらせてくださると信じたのかもしれませんが。アブラハムは、神に従う者に、神は必ず、何らかの備えをしておられることを信じ、神の備えに信頼しました。それで、アブラハムはその山を「アドナイ・イルエ」と呼びました。これは「主は見ておられる」という意味です。私たちには見えない将来のことも、神は見ておられてすべて備えてくださいます。神は、昔も今も、神に従うものの将来を準備万端、一切を備えていてくださるのです。

実際、神は、私たちの人生のためにイエス・キリストによる救いという最高のものを備えていてくださいました。イサクは「あなたの子、あなたの愛しているひとり子」(2節)と呼ばれているように、ここでは、神のひとり子イエス・キリストの雛型になっています。モリヤの山というのは、このときからおよそ千年の後にそこに神殿が建てられた場所です。そしてすぐ近くのゴルゴタの丘で十字架にかけられました。イサクがたきぎを背負って山に登ったように、イエスも十字架を背負って、ゴルゴタの丘を登りました。神は、アブラハムには「イサクに手を下してはならない」と言われましたが、ご自身は、御子を十字架で死なせました。それは、すべて、私たちの救いのためでした。神がアブラハムに言われた「あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた」(12節)とのことばは、「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましよう。」(ローマ 8:32)とのことばにこだましています。神の備えを信じて、神に従いましょう。